フルニエ壊疽を契機に指摘されたカルシフィラキシスの１例

駒井 宏行、金田 一真、古川 優太、福永 淳、森脇 真一

大阪医科薬科大学　皮膚科

62 歳、男性。慢性腎不全にて 7 年前以上から血液透析中である。当科初診 4 カ月以上前か ら四肢に皮膚潰瘍がみられていたが放置していた。当科初診 3 カ月前にフルニエ壊疽を発症し、当院腎泌尿器外科にて抗菌薬投与とデブリードマンが施行された。その際に両足趾 、両手指、左下腿に疼痛を伴った皮膚潰瘍を指摘され､ゲーベンクリームによる外用処置を継続されていたが､改善しないため当科紹介となった。当科初診時、陰茎、両手指、左下腿、両足趾に壊死組織が付着した皮膚潰瘍を認め、著明な疼痛を伴っていた。単純 CT で下肢の皮下軟部組織や動脈に石灰化がみられ、血液検査では補正カルシウム濃度高値、 リン低値であった。左下腿の皮膚潰瘍を皮膚生検したところ､病理組織学的に真皮から脂肪組織の血管内を中心に好塩基性の沈着物がみられた。沈着物は Von Kossa 染色で黒色に濃染しており カルシウムであることを確認した。以上から自験例をカルシフィラキシスと診断した。